

筑前

芦屋案内記

附 石遺物と歴史を訪ねて

筑前芦屋旧跡巡り

芦屋案内記の題字は黒山蘆江老筆

まえがき

父の遺品の中に、芦屋町山鹿尋常小学校女子同窓淑女会発行の会誌「浪懸」第三号がありました。内容は黒山蘆江先生の書かれた「芦屋町案内記」で全容が埋まっています。但し、末尾に紙数に制限せられ全文を記することが出来なかつたとあります。芦屋町正門町黒山氏宅を訪ね芦屋町案内記の原本はないものかとお問ねしたが、今は見あたらないとのことでした。

昭和五十九年春黒山家で古文書を整理中「芦屋案内記」が見つかったと連絡があり、早速お訪ねして見せて頂きました。この芦屋町案内記の草案は、当時の芦屋町町長藤井正倫氏の依頼により黒山蘆江老が書かれたものです。浄書されたものはより充実していると思われませんが発見されませんでした。

黒山富靖氏(蘆江老の孫)に乞いて「芦屋案内記の草案」の復刻版を刊行することの承諾を得ましたので、こゝに出版することにしました。

芦屋案内記の後に筆者が昭和五十七年十二月に編集発行した筑前芦屋旧跡巡りの増版を附しこの書名も「筑前芦屋案内記」としました。

## 黒山蘆江翁

神武天皇社は記紀にしろさされているように、人皇第一代神武天皇御東征の砌、一年御滞在になつた当地筑紫の岡田の宮の聖蹟に建てられた神社で、その創建は古く由緒正しい神社である。始は昔ヶ原にあつたが黒田藩より社地として三千坪を乞い受け新に現在地に社を建てた。黒山家は代々神武天皇社の神官を司る家である。

黒山蘆江翁は諱右近、後改め敏行。嘉永二年正月十五日に生れる。父は神武天皇社々司黒山利廉。幼より学問を好み林謙介(林次敏の父)、安広仙杖、櫛田春浮等に儒学を学び、漢籍は伊藤直江(伊藤常足の孫)に学び、皇典は明治二年豊前の水哉園で村上仏山に学び、神武天皇社々司五代目を継ぐ。

明治四年まで本城村で私塾を開いていた。明治五年学制の発布により、旧藩校修猷館内にもうけられた「学科取調所」に入り指導を受けたのち、明治六年芦屋小学校の教師になつた。芦屋小学校の初代校長である。同七年に辞したが、同十一年に同校の第四代校長に再びなつた。県立芦屋中学校にも奉職している。のち赤間小林区署長を勤めること十余年、明治三十一年に辞職。明治三十二年より社務所で、萬翠堂という漢学塾を開き子弟の教育に貢献した。大正十一年秋病の床に臥し、同十五年正月十四日歿した。享年七十八歳。

筑  
前

筑  
前  
屋  
案  
办  
记

草  
集

菅原所安内記

総説

山毎ハ山毎社ト稱シ共ニ

川ヲ隔テ南北ニ

菅原河ハ古ノ國水門ト稱シ遠賀川ノ末流ニ位シ中津ノ

中津ト相對シ瓜景絶佳ニ古来有名ノ港灣ナリ其

河ハ記洗陽池筑前早鑑池等ノ泉ナリ其

河ハ記洗陽池筑前早鑑池等ノ泉ナリ其

神武天皇社御録記ノ一節ニ曰ク國水門ト東西高船乃

輻湊スル所ニト九州乃要津ト梁山海乃絶勝

土地乃秀麗民庶蕃富ト云々強ト千餘家軒を有

ク入港尾を如ヤリシ白沙ハ山を飛來テ南北たつちあり

數一乃乃松樹ト蒼蒼トトト四時以出まよく江

岳林也ト乃觀殊ト奇絶ありけりト又前川ト

遠く去り高根より流氷の晝夜を合に北にむ  
くを一望千冒烟波無浪天に接する江山乃外  
弓少乃風帆烟を沙多乃におひたし新夕出  
入る大船小舟聚散絡得として交易利濟  
まくるうらんとあそむ神武帝車駕をとめ  
りれし靈蹤ゆへにや其後仲哀天皇神功皇  
后も海軍をとめ給ひまた安徳天皇も大宰  
府より比水門に蒙塵し給ふとき山麻呂浦に  
移り給ひ山麻呂兵後治が城を行在所として  
姑く法駕を駐め給ふ凡人皇乃最初より四  
代乃天子海をま給ふ各更に一、二、三、四乃

名減にめりたく傳ぬ

花陽起二曰葛葉里浦沖溪 枝村大城 粟屋 高千有十九石

三十九石

北ハ濱海 野漫ト云 常國第一ノ灘也 東ハ入海大河 落合タル

溪ニ言 衆船駁系船ノ因茲高貴富有者多ク居住シ凡ノ教三千

二三百ノ在所也 自上古代載文書詠詩歌世ニ名高キ所也 当地ヲ崗

縣岡溪トト曰 中紀其他古書往々ニ記ヤリ 遠賀ノ岡同音也 高

郡ノ大溪ト云 南江入ル水莖乃岡ノ溪ト歌ニ詠セリ 水莖ノ岡

ノ屋形ト請ルル近江岡也 一説ニ當溪ヨリ西才寺木村内浦村迄

ノ海濱三里間高キ岡續リ故ニ岡ト云トカヤ此岡也 皆松

原也 岡ノ松原ト名付テ是ノ亦名所也 葛葉ト請リト宗祇

法師ノ名所方角掛ニ是ハナリ 一説ニ内浦ト吉本ノ間ニ昔ハ入海



アリテ是ヲ岡ノ湊ト云ト也 篤信曰仙覺万葉集註ニ當國  
瓜記ヲ引テ曰岡縣東ノ側ニ近リ大江口アリ号ケテ岡湊ト  
云大船ヲ入ルニ夕ヘ夕ト記ヤリ 吉木内浦共ニ遠賀ノ縣  
ノ西也東側ニ近ト書ルニ是ナリ

日本紀曰神武天皇甲寅年冬十月自日向國祭船師平筑  
紫神十有一月丙戌朔甲午天皇至筑紫國岡水門十有  
二月丙辰朔壬午至安藝國ト見ヘリ天皇暫此所ニ御滯  
座也人自是始ヨリ既ニ此所ノ名アリ久遠凡名所也

同紀曰仲哀天皇八年得計能龍衣國幸筑紫時岡縣主  
祖能野道海路自山鹿岬迴之入岡浦下云皇后別船自  
洞海入之潮洞不得進中云及潮滿泊于岡津下云洞海上

篤信談古所<sup>リ</sup>同郡若松迄五里、内海、間<sup>ニ</sup>海士住<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>云  
ト也

一 筑前軍鑑記<sup>ニ</sup>曰 岡ノ湊

葦屋ノ湊也岡津岡浦氏云葦屋ノ湊  
田島高十百八十九石三斗九升合内島高  
七百六十三石三斗三升三合

此所、神武天皇 仲哀天皇 神功皇后 御幸有<sup>レ</sup>所也 名高キ  
名所也 由未畧之新名寄セ<sup>テ</sup>序<sup>ニ</sup>曰 葦屋ノ湊ハ日本  
起<sup>リ</sup>及<sup>テ</sup>筑前凡<sup>ク</sup>記<sup>ス</sup>共<sup>ニ</sup>仙覺<sup>カ</sup>萬葉<sup>ノ</sup>註<sup>ニ</sup>筑前國岡水  
門有<sup>ト</sup>ス云々以下 筑陽記<sup>ト</sup>大同小異<sup>ナ</sup>十九<sup>年</sup>畧<sup>ス</sup>

菅原河ノ位置

遠矣川に跨り西北に細多河臨し西に岡垣を南に吹くお  
東に吹くおに隣り

此山

上右菅原ヲ岡澤下桶し山麻ヲ山麻北ト桶せしが世ヲ経ルニ後七  
菅原ヲ菅原お山麻ヲ山麻おト桶スルニ至レリ菅原ハ菅原所  
菅原村<sup>大城菅原</sup>ハ菅原浦<sup>河内</sup>ト三区ニ別ケタリしが明治三十二  
年所お制之カ後菅原河ト桶ス其後明治三十二年菅原河  
山麻お合係し菅原河ト桶し現今ニ至ル

幅及面積

幅東西一里南北十町面積五八四方町

区畫

甚池二十区三別山麻七区ト九

地勢 東ニ山脈アリテ西南ニ所部田圃及桑野ニシテ

甚池ノ海岸ハ出入ナリ山麻ノ海岸ハ積出入アリ遠々  
川ハ所ノ中央ヲ流シテ海ニ注リ

戸數一千五百四十八 人口一万余人 中甚池

内 甚屋九百四十三戸 山麻六百五戸

但し四十二年一月ノ調査

世屋王 遠賀川畔より一里余

神社

園溪神社

祭神

大倉主命 荒天四佳姫命 瓊使鳴男命 等

創三年代詳しうナルニ 仲哀天皇 御幸アリし時 年常東老ヲ以テ祝

トナシ 奈ニシテカニヨリ 日本紀ニ明記ナルニ 古来ヨリ此地

鎮守

此水門ノ入リニトシテモシテ海邊ニテ天皇園霧主命 熊野ヲ詣リテ  
白ク休ミ進ムルニ此ノ地ニ能ク善ヨリ臣里ニテ此ノ地ニ神宮ニ有テ  
ニ神アリテ必ク神ノ心ヲ能ク養フニ夜トナシ 奈ニシテ日本ニ明記シアリ

後世須子盃鳴命ヲ相敬ニ祭レルヲ以テ俗ニ之ヲ神園社トモ稱ス

宝物ニ公明面アリ

神武天白王社

崇神

神武天白王

仲哀天皇

神功皇后

芦屋区ノ西南林林中  
皇神青松中ニ在リ

日本<sup>記</sup>卷三

神武天皇御卷ニ甲寅年十一月丙戌甲午天皇

至筑紫國岡水門古事記ニ於筑紫之岡田宮一年坐

トアリテ天皇東征ノ時此地ニ御幸アリテ一年間御駐蹕アセシ

タルニ付當時ノ人民其靈跡ヲ奉ニ神社ヲ建設シ及此ヲ以テ

来リリニ中世兵火ニ罹リ社殿烏有トナリ僅ニ小祠ニ残リ居

リタルヲ近享ノ初々藩廳ノ允許ヲ得再建ヲナシ此ノ時藩主ヨリ

御社地ヲ初々禰々御坐可附アルノミナラズ神武高公以來代々ノ

此藩主御参<sup>社</sup>拜アリテ御尊皇宗不<sup>四藩中</sup>踐御社格ハ觸宗廟ニ<sup>此</sup>非<sup>此</sup>ナリ

地方有名ノ神社ナリ遠賀川驛ニ掲テスル神武天白王社ハ是ナリ

神社

狩屋神社

高野七田社、三ツ山、森、以所、柏原浦之、岸、中、夜、方、主、沖  
 右、夜、通、是、更、方、沖、夜、天、鬼、を、根、年、下、お、夜、天、力、時、年、下、お、日、九  
 月、九、山、城、石、屋、水、ニ、狩、屋、社、ア、リ、之、テ、作、知、し、リ、ト、カ、ヤ、手、力、時  
 年、下、社、ノ、粟、ニ、戸、の、明、印、ト、テ、ア、リ、シ、カ、破、壊、ニ、ケ、ル、ハ、此、社、ニ、合、年、し  
 ル、ナ、リ、昔、ハ、島、仰、十、八、村、ノ、終、社、ニ、テ、總、主、殿、也、氏、代、ノ、尊、敬、シ、ケ、ル  
 故、年、中、ノ、祭、祀、始、年、リ、社、殿、壯、石、年、ナ、リ、ト、云、曲、々、臣、氏、地、田、ヲ、没、収  
 シ、少、年、川、氏、國、主、ト、ナ、リ、テ、社、生、氏、モ、民、間、ニ、下、リ、シ、カ、ハ、社、氏、モ、衰、へ、又  
 サ、レ、ト、今、元、田、舎、ニ、テ、ハ、名、社、ニ、テ、仰、社、ナ、リ、大、内、氏、ノ、大、府、宣、ア、リ、ト、曰、ク

大府宣太宰府在廳官人等可任早聽宣管筭事而牧  
於山縣者將屋宇之戶服官太監司職事右以平春園所  
補彼職也者在廳官人等宣兼去依宣行之以宣天文十九  
年十二月十九日大藏多々良能任去刑



寺院

海子寺

金屋町ニアリ江岳山世福院ト稱ス天台宗叡山派中本山揚子妙善寺末  
ナリ義隆之年己亥年ノ堅ト云ル僧向基ス本寺出沙門天立像高ハイツノ  
以テヤ海中ニ上タル由言何ノ胎檀ニ不動ノ木像立像高アリ佛師  
去百日作ト云

観音寺

中ノ路町ニアリ潮音山ト号ス禪宗臨濟派中本山那珂郡堅和お  
出葉福寺末ナリ間山ヲ錦溪守文禪師ト云後十松院主至徳二年

乙丑ノ新建慶永元年 昔ハ松原ニアリ也門ハ里田長政ノ建立ニテ

之ノ再興ナリ本堂坐像高 觀世音ナリ坐像高 應永九年甲戌春

此浦ノ漢又刀根四郎ト云者汐入川ノ中央ニテ鯨網ヲ下シケルニ折節

地凡列クナリ網内津シカリシカハ怪ニ居タル折カウ木片ノ網ニ掛リ

ケルヲ引上ケ見レバ觀音ノ像アリシニヨリ持歸リテ本堂ニ崇セシム

其後当寺ニ安置セシト云其以テ其屋寺ト云シテ此時ヲ觀音

寺ト号ス今ノ本堂ノ胎中ニ金小像ノ觀音アリ是ノ刀根カ

取上ケシ像ナリトヤ此小像今ハ 当國三十三所第一三番巡

拜祈ナリ 慶長中江月初尚此寺ニ一宿トテ作シル詩

本是煙裏笠蒙雨生漂々泊々此身輕  
曉天霜冷睡醒在芦屋残燈鐘一聲

禪壽寺

船形町に在り員海山下号ス禪宗濟家申申山那所堅福お  
出峯福寺末ナリ開山大員禪師道隆ハ元國ヲ帰化ノ  
僧ニ電山院文永四年丁卯此寺ヲ建テスト之本尊釋迦ノ  
像(坐像高三尺)ハ運慶作テ古佛ナリ(國溪社記ニハ天竺ニ  
本レルヲナリト云ヘリ)  
又達磨ノ画像アリ僧去模カ仙堂不稿ニ此寺ノ事ヲ載  
セタリ寺領モアリト見ヘテ宗像ヲ限帳ニ五町ニ及六十步  
芦屋禪壽寺ト記セリ寺地ニ觀音堂寶蓮塔アリ

本師堂

元祿園在境内ニリシモ御修葺ニ依ル佛位は滿ヲ材セラレタルニ  
現在ノ禪壽寺境内ニ移轉ス毎年田三月二十夕ニ土下七廿月

二十日ヨリ王口と西度ノ祭典ヨリテ近村ヨリ衆人拜立テノ給價トシテ  
群衆ノ露店見世物澤中ニ附近ニ充滿シ宮ニ般駆ナリ

### 光明寺

市場町ニアリ悦喜山ト稱ス澤土宗鎮西派赤山西京智恩  
院ニ属シテ中本山タリ四條院高禪元年乙未取主支上人ノ弟子  
良定一書ニ然阿 里山お内去新川ノ末ニ建シ之ニ其後後柏系院

ノ大永元年迄 已重誓ト云佛今ノ地ニ再興ヤリ本尊阿彌陀  
佛 立像長三尺 志心信都ノ作ト云寺地ニ觀音有鐘樓葺アリ  
寺ノ都 三ノ鐘ル壯麗ノ寺ナリ

安曇寺

中ノ路町ニ在リ海雲山ト号ス時宗遊行政本山相模國藤澤

山清淨寺末リ寺傳後光嚴帝ノ應安元年辛亥一痛

上人ヲ才七世像所上人上後不名開基スト云

三箇寺ノ像ハ安所弥カ作ト云古ヤリ領教アリシトカヤ宛篤ニ吉郡

城主寺ノ名ヲ記セリ唐寺以即印祿二年討北又ノ永正十一年九月云々

又源氏妙珍禪定尼上野筑後寺本野田文死トト見エリ

金山寺境内ニ地蔵モアリ子安地蔵ト稱シ男名ヲ祈リ夫ヲ釋スモ云々

安曇寺

中ノ路町ニ在リ慈心山下跡ハ有宗ニ派本山西京本朝寺ニ編ミテ中本山タリ

天文十一年壬寅、山像氏ノ家臣道恩ト云者初メテ草庵ヲ立同三十二年癸丑九月

本師寺号ヲ許セリ其頃ハ大城ニアリ寛永十年癸酉船隊町ニ移シ元禄二年

己巳又辛ノ地ニ移入初メハ豐美宮園ニ舎居ル照幸ノ末ナリシカ慶長五年午  
里田氏ノ命ニ依テ西本願寺派トナレリ迄郡ニハ頗ル壯麗ノ寺ナリ

安長寺

東所ニアリ西方

安長寺

三軒屋町ニアリ其郡山ト稱ス古来西派本山西京寺ヲ末

ナリ寺傳ニ元暦元年甲辰山岳岳次者也創建スモト

志事宗第三ノ印薩文寺ト云シカ元龜元年庚午順教ト云僧

志事宗ニ改メタリト云 一後中興改宗ノ僧ヲ 正徳元年辛子卯

玄高ト云

六月寺跡 木俣 寺跡ニ地蔵アリ

法輪寺

中おの内法輪寺谷ニアリ佛海山ト號ス禪宗浄土中本山那珂殿  
堅和お常福寺末ナリ此寺古刹ナリト雖凡開基ノ年曆不詳初ハ  
ハ貞言宗ナリト云中興開山ヲ花海珍和尚ト云乃チ鎌倉ノ  
建長年實浄妙宗末寺ニ住持タリシカ應安七年甲寅  
比寺ヲ建テ是ヲ禪刹トナシリ昔ハ大寺ナリシカ兵乱後  
漸ク衰微ヤリ黒田家ノ山林ニ坪寄附アリ文政六年癸未  
三月本年ノ屋ヲ修葺セテ寺ノ西ノ谷ヨリ土ヲ取リテ高四  
尺許ノ五輪ノ塔ヲ築出ヤリ其間ノミ立シ塔ト是エテ小キ五輪ノ塔  
五十餘ニテタリ其内塔ノ跡石ニ文字彫ラレモ二箇アリ一ハ

逆修厄本奸三七女事務勿々晴土智實月明九界の捐の致の釋其口

撰一ハ右逆修善根為沙彌妙實入教奉不生理快入建此墳入德德

元未載五月日トアリ（舊其ハ白河度ノ）又石佛十六俵アリ高一尺七寸或ハ

一尺許リ其側ハ小石ヲ埋メタリ經石十九ハシ其下ヲ鋼造ノ經筒

出タリ高五寸徑三寸款アリ曰妙法蓮華經全部ハ卷奉為宮東

内書司子奉拜所前相与一百箇日又早市為滅盡生善頓證善提

一百頓寫供馬良如右德治三年正月廿二日道師遍照全到淨宮

勸進遍照全到皇筈母保善菩薩戒尼遍照全到清淨慧教白トアリ

（此法ハ後ニ條院ノ年アリ宮東内書司トアリハ將軍家ノ息其ハ子奉拜所

前ト移スモ條院在在將軍先代アリノ御名ナリ賴家ノ息ニ子奉拜所前アリ實教ノ

御名子奉拜所前ト云ヘリカレ氏此法三年ハ此條院ノ時將軍久明親王ヲ廢シ



守邦親王ヲ立し年ニテ百年後ノ事ナレバ其氏別ニ同名ノ人アリト云ベシ  
當寺ニ此等ノ塔アル縁由傳ハラズ經筒ハ故ノ如ク瘞カリ又文昭  
六年甲午ニ鑄造ヤシ古鐘アリシカ住僧壽如シテ年八十シ

### 大乳寺

本おノ内萬所ニ在リ皆乘山ト稱ス降ル宗鑑西派本山西京  
知恩院ニ屬シ中牛山夕リ岡山聖光上人（香月彈正別茂ノ弟ナリ）  
香月お條ニ詳ナリ

順徳院建保三年甲戌創建ス此所領主山麻氏ノ菩提寺ナリト云  
文祿三年甲午火災ニ燒失シテ其後ハ草庵ヲ結居タリシヲ慶長七  
年壬寅殺譽信利頓ト云僧中真ヤリ實保ニ年ヲ祭テ其田ノ屬ナリ  
山林千坪寄附

の地花予

柏原浦ノ海中ナルカ場ノ入り口ニアリ

西土年ノ初メノ地花予ヲ建設セントシテ地ノ墟リタルニ下タリテ石佛好マシ出テタリ其重者及雁像像ヲ刻シ  
アリテ古雅愛スベシ何ゾ時代ノモノナルヤヲ誤ラテ考フヘキモノナシ或ハ傳昔シキ重盛且ハ其福ヲ祈ル者大  
宋ノ正月王山ニ至シテ西及ビ田地ヲ獻シタリシト重盛ハ其後重盛マシ之ト剛々若クハ後後及ビ  
石佛ヲ載セテ宇像却江口ニ至リキタルヲ此時年家ハ已ニ亡ビテ流ハセトナリタルハ其後花徑ト石  
佛ヲ奉テテ多ヤリ去リタリト花徑ハ度長年同國主運田長政公ヨリ奉賜確現ニ奉納シタリト云リ此  
ノ石佛一個ニテテ固マシト四共ナラシメ此時代或ハ此所ニ之亦石佛ヲ渡ルヤタルコト凡ヤ尚土調査ヲ  
要スベシ

名所四跡

御手水池

芦屋屋敷ニ在リ

芦屋屋敷 神武天皇社ノ西五丁ニ在リ 白沙三月松中ニ在リ池ノナリ西ノ  
沙丘ヨリ中米ヲ眺望スルハ有名ナル山鹿洞山海中ニ斗出シ白嶋及ビ  
長洲ノ遠山其後方ニ連ナリ西ニハ大嶋地ノ嶋鐘岬等ノ大小嶋共列  
シ凡ハ早昔可倫ナリ神武天皇社市邊沢ニ記スル所ナリ如シ  
芦屋濱ノ内砂中より湧出ル白乳何チ子民呼ブ而河水と云

宮城ヲ去ル一四丁斗リ母ニ當トリ其水源徴ニテ州根ヲ浸スニ及  
ラスト至氏漸盛ニシテ瀑布ヲ成セリ清流浪ミトテ四時不違  
日早敷ヲ侵ト至氏水坑力減スル事ナシ僅一丁ニ満タスシテ砂中ニ  
乾深シ一滴ヲモ餘カス消尽ス靈水ト云ハシ是往古  
神武天皇東征ノ時此ノ水ニテ盟設シ給ヒ此所ヲ宇佐宮ニ  
神ヲ遙拜シ給ヒ其後仲哀帝仲功皇后乃ニ帝モ先例  
ニ従ハセ給ヒ水ニテ而拔シ給ヒコト云々

高濱松

船取町ト後口トノ向ニ松林中ニ在リ此處ニ可松アリ就中鶴松ト  
補スルモノ其形鶴ニ似テ立可觀ハナリ遠來ノ遊客ハニテ杖ヲ此  
所ニ寄リモノ嘆賞セカレハナシ

城山・城址

山度已三在り

山度兵名治秀道が安徳天皇ヲ奉ヤシ城ニテ其後一麻生氏ノ據  
 リテ多地方ヲ鎮守ヤシ所ナリト云此山ハ藤原氏ノ所トナリ山  
 山度ニテヤドヤド自ラ城址ヲ示スル事ナリ川ヲ隔テ、芦屋ト相對シ  
 山度ニテ見ニシヨ声屋ヨリ見タル方爪屋ニ自任ニテ芦屋ノ海山ヲ  
 見キテカカサト  
 佐々木氏ノ奉ル事ナリ放

三守松石

芦屋ヨリ波津浦迄御音津ニ此山ハ海濱長三里ノ間白砂雪ノ如ク堆積シ

教下ノ上月松之者、樹野ノ其上ニ生立シ爪光明媚ナリ此ノ松林中ニハ

神武天皇 神功白皇后ノ陣跡アリ神蹟御幸水池此松原ノ中ニ在リ有名也  
 松原此松林中ニ生立シ之ノ採取空力遊歩スルモノ  
 同ヲ絶タズ

廿日石

神武社ノ西南七八十間ニアル小丘ナリ此所岡田宮地ト云傳フ昔ノ原ト云ハ此也  
卯皇陣進多ク故ト入レシ後セ佛法盛ニナリテ宮地ヲ寺トシ甚也寺ト  
云フ梵刹ヲ起シ寺觀音寺境ニ狭ナル社ニ立テ是宮ト崇メテ奉仕セシ  
ラ三百年以前甚也所ニ寺ヲ移ナルニ因テ社ヲ移シ奉シ

波掛ノ山

山唐区ニ在リ

山度浦ヲ柏原浦ニ達スル海岸ニ佐州也散石ニ備列ナリ西八里ニ起ルトキハ白波

此ノ散散石ニ觸レ碎ケテ花トナリ此ノ奇觀ナリトス高山ニ立テ即九州ニ下シ

暫ク此新ニ杖ヲ両メ此ノ岸ニ誌ニテ波集ル本はあまたあり

時山前ニ遊波集ル本はあまたあり波集ル本はあまたあり

波集ル本はあまたあり

洞山 柏原浦ニ在リ

柏原浦ヨリ海中ニ穴ヲ出シタル小島ニテ前面ヨリ背面ニ母貝キタル往キ又年ヲ  
キリノ圍キ穴アリ俗ニ神功皇位ノ弓ヲ射タキトシ此ナリト云ハ其神功皇位所  
仍ニヨルニ住ミ明神ノ御所為ナリト云ヘリ此ノ周圍ハ平タキ岩石アリテ十段ノ  
山ト稱ス此處ニ山名ノ洞ニハ浴ニ付ケト稱ス小サキ貝又ハ海空ニナド散ラヌ  
ナリ遊客ニ生カシ浦底生汁ノ湯ニ供スルノミナラズ遊覧ニ喜ビ採取ニ任シ  
其味ヲ齊ニテ此所ノ瓜壳画ニ勝リテ文人ニ筆ヲ着テ難シ此所最モ  
夕干ノ遊ビニ適ス

狩尾岬

日本紀

仲哀天皇ヲ沸卷ニ山麻ノ岬ヲ廻リテ洞ノ津ニ入り玉フトアル山麻ノ岬

トハ此岬ナリ海岸ハ平ナル石アリテ其ハ海中ニ出テ是ノ名ニ因リテ

是レリ仍テ洞山ノ岩石ト洞ノ名ニ因リテ洞山ト稱シ其前

ハ海ヲトシテ所謂柏原浦ナリト云ヘシ海案ノ生カシ洞山ト同シ

夏井濱

狩野岬ヲ距ル僅カ十丁ニ滿ノ処ニテリ此處ニ古來ヨリ奇石堆積シテ同ニ  
玉ノ如キ透明ナルモノアリ此ノ石ヲ拾ハントテ未遊スルモノヲ見シ

垂向野橋

東岸岸ニ由來トシテ架ケタル橋ニテ其長百ニテ間ナリキ稀有ニテ橋ノ  
當時ハ其名ニ有向ナリトナシ而時頃アリ廢絶セシニヤト傳ハレ拜トテ  
此橋ノ事ハ葦垣草松葉傳中掛ニ出ル所ナリ葦屋ト云ヘテ向東西ニ渡ヤシ  
橋ナリ今ハ無シ古ハ橋ノ有ル所ハ今ノ船渡ニテリ同所ヨリ一町ホト南ニ在リ葦屋ノ  
方ノ橋詰ヲ今モ橋本ト云亦橋本邊ヲ今ハ田能ト云葦屋ノ内ナリ其南  
ノ野ヲ今ハ田能野ト云垂向野ヲクマノ立日近ケレバ世ニナリテタクマ  
ト云ナルハ今ノ船渡リル所ノ川ノ廣サ百ニテ五間ホトアリ故ニ橋モ長ナリト  
云傳ヘリ橋ノ下ヲ大船通りタリト云傳

芦屋金

芦屋区、内字金屋所ニ有名ル芦屋金ヲ鑄造セシ良工数戸アリ、其祖  
先ハ元國ヲ歸化シタルキニテ、其良工菊桐ノ金ヲ鑄造シテ、其金ニ奉獻セシカハ山  
麻衣近縁ノ補ヲ賜ハル世ニ菊桐ノ金ト稱シテ、其金ノ愛玩所ナリ、其銘ニ  
雪舟或ハ元信、其等アリ、天正ノ頃、漸衰ヘ長政ノ國ノ頃、近ハ鑄造ノ家アリ、モ  
其後家絶ヘ、末裔ノモ、博ヲリ及姪ノ廣ニ在リ、其法ヲ傳フト云ハリ、

産四千芝、優ノ鳳尾雀一

高一丈七尺、廻一尺、一根ニ十枚、株アリ

合戦ヶ原

中之河所ノ上ニ、凡沙丘アリ、余ハ官林トナリ、高後ト稱ス、中之河、官林ト稱後ス、  
日本外史ニ、常田権直ト、其草屋浦ニ戦ス、其子加賀ノ森幸ヨリ、其後スルト  
カ、此所トナリ



大城城址

大城ノ東三所許ニ大塚ヤ塚トテアリ城址ト云石垣ノ形猶ノコレリ蒲葺者  
竹藪類ニ平クテ攻メ下リし時此所ニ居トリト云

編者曰ク大城ハ其屋ノ本村ナリ其大城ト名ケレ由果ニ古記ノ徴スヘキモノナシト云氏此ノ其包ハ抑致  
天皇ノ行幸ナル岡田は空ノアリし所ナルニ大城ト名付ケタリヤ又ハ岡縣主能鯨ノ居城セシハ  
アラマヤ大塚ハ塚ト云ル手現在ニル所ナリ考ルモ向レ古ハ名アル人ノ居城セシ地ニバニ古ヨリ城  
ノアリト云能鯨ヲ暫ク滞在セシト云

能鯨宅址

祇園山須賀中社ノ邊ニ岡島主ノ祖能鯨ノ宅址ナリト云傳フニ十斗前

マテハ其社アリシカ今ハト云シ能鯨ノ宅址ハ三志村ニアル氏岡島ハ彼人ノ知レル地ナレバ  
別社ナトアリシカ又ハ初メ此所ニ居テ後ニ三志村ニ住シ  
ト云カタシ

安法天皇行宮址

村ノ東十所許大石山ニアリ山麻兵ノ後次来リ遠此山ニ假ニ御所ヲシツウヒテ  
女は、天白ヲ入レ奉リ此處ノ田ニ昔ヨリ夏月蛭生ル奉ナシ分袂ノ時他  
所ヨリ苗ヲ移スニ偶蛭後ヒ来ル奉アレイイツシカ失セテ見エス是即  
皇居ナリシ故ナリト云停カノ谷ヲ城周ト云又鐘掛松トテ天白鐘ヲ  
掛サヤラレシト云松アリシカ今ハ枯テナシ少祠アリ天白ヲ奉ル

山麻城址

村ノ東南入江ニ臨ミタル小山ナリ本九ノ地ニ及餘ニ九ノ趾ニ及餘アリ  
此所山麻氏世々ノ居城ナリト云平家物語ハ卷ニ壽永二年九月平家  
ハ歸方ニ及惟義ニ追ハレテ太宰府ヲモ落ラシシカ山麻兵ノ後次来リ

遠敷千人三平家ノ所達ニ入ルカリテ幸ノ遠ニ具セウシテ山麻  
ノ城ニ籠リリ山麻モ敵寄ルト聞エシカリ取物モ取アヘス平家ノ小舟  
取乘テ夜モスカウ其意お不柳浦ヘソ返ラシケル平家盛衰也

東鑑四卷元暦二年三月廿四日於長門國赤間橋浦海上源平相違谷

隔三町漕向舟船平家土而餘艘分三千以山峨兵藤次幸遠并仁

浦堂等為水軍挑我下源白之將帥及平尅平中遂敗頃七月十一日

鎮西季云々平家没官領種直種遠幸遠等所領高田板井

山麻以下所處事被定補地畝之程者並置沙汰人心靜可

被歸沈之由今日所被仰遣矣一州之許也庄治抄遺物抄ニ昔平家盛衰  
ツマササト云者アリキ夫ハ鎮西前

國山鹿庄ト云所ニ住シト見エタリ鎮西要略二卷建久七年云々片御

丸兵衛尉家政朝細  
三田力賜封於筑前國廿屋山麻之庄且奥州

功之賞云々山麻者平家没官領也。其家政賜之曰桶山。麻亦子孫補麻生至未代基之矣。

海東諸國記ニ信哉丙戌年遣使未質ノ書桶葉前麻生信哉丁亥年又遣使未以不堅不接待トリ此信載ト云人譜第不詳

麻生系圖 曰 宇都宮三郎朝綱子山麻左衛門尉家政子山麻

左衛門尉時家次山麻四郎資政時家子山麻又次郎家長次麻生

小次郎資時次資氏次資忠家長子五郎政家九郎長資次麻下

經長六郎考家四郎家信法名宗信長乾政家子親家政親

親家子家久長親子政親七郎家久孫長為八郎家久次高

親七郎次下長政トリ 常國麻生庄野面庄山麻庄盛田庄兼牛

盛田村高津村二村高津村 此村在所トレス盛田村ノ故郷ニ高津ト云所トリ

小倉お山沢お等ヲ領セシ事一康正頃ノ文書ニ出ツ世山藤生  
 ト稱セリ享祿天文ノ頃ニハ藤生孫お守ト云々在城セシト  
 貞正タリ天正ノ頃ハ藤生上総ハ元室ト云々臣ハ西征時其家人  
 松津三河守箱崎ニ行テ謁見ス其後當國十早川及隆早ノ所領ト  
 ナリケルハ藤生天松長野黒木以下十六人ト共ニ隆早ノ幕下トナリ  
 近年石ヲ取ニトテ此山ノ東ノ方ヲ掘山崩セシニ體多ク出タリ我我ノ  
 人ノ骸骨ナルハシ

学校

尋常小学校 中ノ高ニ在リ

明治六年上月中旬元ノ学院ノ若殿 善定ヲ假校舎トシ創設シ其翌年  
 生徒ノ増加セシニテ井ノ原ノ岡溪神社旧劇場ヲ修繕増築セシ之ニ移  
 轉シ岡南校ト稱ス而キ生徒ノ便ヲ圖リ市井ノ田中目ヲ定テ借田  
 シテ分校トナセシモ教員ノ事業日進月歩シ假校舎ニテ済ムルモアノ子ハ

明治二十九年三月、慶新築工ヲナシ遊ニ旌表旗ヲ天祥変スルノ隆盛ヲ  
致セリ前通ハ遠賀川ニ臨ミ山麓ノ禱山ト對シ北面ハ白沙三月松連傳  
カハ三里松原ヲ隔テノ湯カハ孔大土寸寺ノ禱山ヲ奠ヒ瓜原松原在實ニ  
人目ヲ驚カス近年又宇校園ノ移ケアリテ益々異彩ヲ放ツニ至シリ

### 高等小学校

明治三十一年福岡縣立中學校ヲ當所ニ開設セリタルニ有リ  
明治三十一年四月より明治三十四年四月まで  
明治三十一年七月から明治三十四年四月まで  
明治三十一年四月より明治三十四年四月まで

高等小学校ヲ夏跡ヲ兼テ開設シテ其後ニ故本校生モ宏壯ニテ器具  
悉備ニ完美情而進歩ノ伴ニ改築ノ必要ヲ生シ明治三十一年

三十年現在ノ校舍ヲ改築スル郡立準教育委員所及女子學校  
業補修學校ヲ併設スル事ヲ決メ

即ニ之ヲ廢止所ナシテ新設スル事ヲ決メ  
高等小学校同様に之ヲ設スル事ヲ決メ  
高等小学校同様に之ヲ設スル事ヲ決メ  
高等小学校同様に之ヲ設スル事ヲ決メ

山鹿の尋常小学校

本校明治四年三月ノ創設ニテ當時唐門學堂ト称

セリ明治十五年現在ノ位地ニ新築移轉シ明治十九年

小学校令改訂ニヨリ山鹿尋常小学校ト改称ス願取

申付連年用隆ニ校舍狹隘ニ苦ク且至多明治三十四年

現在ノ才一校舎ヲ改築ス其後三十五年三月才三枚

今東ニ教室ヲ増在ホ三十五年五月西ノニ教室ヲ増在ホ

三十九年五月三十日所村合併ノ結果従来ノ村之尋常

小学校ヲ消滅シ今日ヨリ芦屋所支ニ尋常小学校トシ

四十二年三月義務教育延長ニ依リ校舍又ニ狹隘トナリ

尋常年中中更ニ五教室ヲ増在ホ

本校ノ位置ハ東北ハ山鹿ノ海山ニ對シ西南ハ港灣ヲ陽テ

甚危朽石及ヒ御芳澤ノ渺茫タルヲ望ミ見立端ノ胸襟ヲシテ

官公署

官所ニ催新後郡役所警署官署稅務所登記所

郵便局等銀行等ノ設ケアリシモ去ル明治十六年七月中夜三十一日四三手ニ

尾村ニ移轉シ引任キ勸業署稅務所ニ移轉シ

十日目下ニ只登記所郵便局長官巡查

駐在所アルノミ然レニ遠賀川改修工事更次長官

月ノ設ケアリシ引任キ工事速欠事務所ノ設ケアリテ

稍四件ニ復スルノ觀アリ

交通

主要道路ニ鐵道ナリト云有之部以テ多ク船道ト

又外ニ海場アリ船手船直方所ニ通ル船道



生利力 七十六万円

内 消費費 六十七万円

租税負担費 七万円 差引 三万円

全町民ノ祝 勸進金 一十八万円

(四十二年三月末)

産物土地及地價ノ昇降十月ノ調査

俵 半費

俵場費 四〇一六円

大町費 一〇〇五九

半生費 三〇七九

農産物

米 二四〇〇

價格 三〇四〇

麦 四六〇

三六八〇

豆 二四〇

一七四五

蔬菜類 價額

一三三八

芋 九七五

九七五

家畜類 九七〇

旅館ニ料理を

旅館ハ市場町ニ山座屋中ノ浜町ニ池田カノニ館アリテ何れモ相違ナシ

客中ノ料理ニ技師有リ

料理を

料理カ 中ノ浜町ニ市場町ニ橋初氏町ニ福壽亭ノニ軒アリ何れモ

紅鱈 且他道におき 味ニ 厚肉ヲ破シ 膳ヲ

供スルヲ以テ 料理ニ 技師有リ

貨物

明治二十年ハ貨物運送ノ許可ナカリシモ  
維新以後ニ至リ官許ヲ得テ梅月橋修メ橋ニ各橋外一橋之貨物運送ヲ出スル  
事ニ着手スル者ナリニモ近年ニ至リ河次廣事業ニテ今ハ梅月橋ヲ取ルニ  
出スル

劇場

大國座ハ幸所ニ在リ明治三十年何年ノ建築ナリ殊ニ其設備ニカク致シ  
結構宏壯ニテ器具器械完美シ地方ニ一橋ナリ

良劇場ナリ坂地ノ良優下向シテ演劇ニナスニサシノ相支ナク良優モ満  
足ニテ妙技ヲ演スルニ至ル

魚市場

太平洋ノ奥ニ肉締リ注美ニシテ其數亦ニ限ナリトス其屋浦山舟浦栢原  
浦ノ漁戸數十家ノ者ハ網又ハ釣ノ漁ニ従事シ其漁獲スル所莫大ナリ且  
他方ヨリ芦屋港ニ輸入スル魚類夥シクアリテ古来ノ魚市場トシテ其  
目下トスルニテ所山旗ニ是ケル設ケアリ其昔モ然ラセリ

三陸物

三陸物ハ種々有ルモ各三陸ト稱スルモノハ其最モ松前路サレハ鱈及ヒ櫻貝等ナリ

ノ松前路ハ所謂三官松平ノ中ニ生ラレシ其味美ニシテ香ニ氣アリ他ハノ松前路トハ

自ラ品價ヨリ異ニシ且ツ生ラレノ高亦莫大ナルヲ以テ其ノ名世ニ高クシ價ハ時

ニヨリテ一定セズト云元生ラレノ初メハ大凡三十才程トモ盛盛リニ至レバ二十才以下ナリ

ノ鱈

其屋ト山底ト間在 珪石<sup>流</sup>中ニ生ラレシ凡味甚多佳絶ニシテ世向者通ノ鱈魚トハ

別物ナルガ如シ若シ之ヲ鱈ニシ美酒ヲ酌マハ鱈毛酒モ其ニ美味ヲ増シ人ヲシテ

自ラ佳境ニ入ラレム

ノ櫻貝

其屋<sup>三陸</sup>ノ中ニ在リ其形花片ニ似テ白砂ノ中ニ散布ナリ其體宜ク櫻花散ニテ貝ニ

化シ此海濱ニ打テ寄セタルモノアラズヤト感テ起ヤレム故ニ此ノ名アリ婦女子ノ如キハ

最モ之ヲ珍玩ナキ奇品ト謂フヘシ明治三十三年皇太子殿下由度幸ノ時

本郡ヲ一ノ献品トシテ獻納セシニ數ハ而感<sup>ハ</sup>アリト云

人知

人知<sup>先</sup>其<sup>二</sup>其<sup>三</sup>を<sup>四</sup>等<sup>五</sup>し<sup>六</sup>、<sup>七</sup>鑄造せし<sup>八</sup>を<sup>九</sup>田<sup>一〇</sup>果<sup>一一</sup>アリ<sup>一二</sup>又<sup>一三</sup>画<sup>一四</sup>工<sup>一五</sup>ニ<sup>一六</sup>千<sup>一七</sup>鶴<sup>一八</sup>アリ<sup>一九</sup>後<sup>二〇</sup>ニ

中西耕石アリ

孝子

り<sup>一</sup>年<sup>二</sup>魚<sup>三</sup>大<sup>四</sup>所<sup>五</sup>只<sup>六</sup>者<sup>七</sup>多<sup>八</sup>の<sup>九</sup>文<sup>一〇</sup>化<sup>一一</sup>八<sup>一二</sup>年<sup>一三</sup>辛<sup>一四</sup>未<sup>一五</sup>同<sup>一六</sup>の<sup>一七</sup>古<sup>一八</sup>者<sup>一九</sup>多<sup>二〇</sup>の<sup>二一</sup>天<sup>二二</sup>保<sup>二三</sup>八<sup>二四</sup>年<sup>二五</sup>丁<sup>二六</sup>酉<sup>二七</sup>共<sup>二八</sup>ニ<sup>二九</sup>青<sup>三〇</sup>銅<sup>三一</sup>若<sup>三二</sup>  
千<sup>三三</sup>古<sup>三四</sup>者<sup>三五</sup>多<sup>三六</sup>の<sup>三七</sup>事<sup>三八</sup>同<sup>三九</sup>の<sup>四〇</sup>大<sup>四一</sup>久<sup>四二</sup>保<sup>四三</sup>若<sup>四四</sup>山<sup>四五</sup>後<sup>四六</sup>家<sup>四七</sup>同<sup>四八</sup>年<sup>四九</sup>共<sup>五〇</sup>ニ<sup>五一</sup>米<sup>五二</sup>若<sup>五三</sup>千<sup>五四</sup>ヲ<sup>五五</sup>興<sup>五六</sup>テ<sup>五七</sup>者<sup>五八</sup>久<sup>五九</sup>  
セ<sup>六〇</sup>ラ<sup>六一</sup>ル

其<sup>一</sup>の<sup>二</sup>事<sup>三</sup>花<sup>四</sup>文<sup>五</sup>代<sup>六</sup>四<sup>七</sup>年<sup>八</sup>丁<sup>九</sup>卯<sup>一〇</sup>同<sup>一一</sup>の<sup>一二</sup>善<sup>一三</sup>八<sup>一四</sup>同<sup>一五</sup>年<sup>一六</sup>戊<sup>一七</sup>辰<sup>一八</sup>同<sup>一九</sup>の<sup>二〇</sup>善<sup>二一</sup>年<sup>二二</sup>同<sup>二三</sup>年<sup>二四</sup>癸<sup>二五</sup>酉<sup>二六</sup>共<sup>二七</sup>ニ<sup>二八</sup>  
其<sup>二九</sup>洞<sup>三〇</sup>若<sup>三一</sup>千<sup>三二</sup>ヲ<sup>三三</sup>興<sup>三四</sup>テ<sup>三五</sup>者<sup>三六</sup>多<sup>三七</sup>セ<sup>三八</sup>ラ<sup>三九</sup>ル 其<sup>四〇</sup>の<sup>四一</sup>洞<sup>四二</sup>若<sup>四三</sup>千<sup>四四</sup>ヲ<sup>四五</sup>興<sup>四六</sup>テ<sup>四七</sup>者<sup>四八</sup>多<sup>四九</sup>セ<sup>五〇</sup>ラ<sup>五一</sup>ル

良民

山<sup>一</sup>崎<sup>二</sup>多<sup>三</sup>所<sup>四</sup>少<sup>五</sup>の<sup>六</sup>力<sup>七</sup>多<sup>八</sup>の<sup>九</sup>者<sup>一〇</sup>若<sup>一一</sup>千<sup>一二</sup>甲<sup>一三</sup>寅<sup>一四</sup>青<sup>一五</sup>洞<sup>一六</sup>若<sup>一七</sup>千<sup>一八</sup>ヲ<sup>一九</sup>興<sup>二〇</sup>テ<sup>二一</sup>者<sup>二二</sup>多<sup>二三</sup>セ<sup>二四</sup>ラ<sup>二五</sup>ル  
セ<sup>二六</sup>ラ<sup>二七</sup>ル

昔か可種致去妻文政九年丙戌青銅若干同河田中傳即國主致付一羽織  
同河傳三郎月俵若干同河芝の妻傳近異言白銀若干ヲ與テ去クセリ  
ニ我僕一昔也下上は次源次共ニ亦若干ヲ與テ去クセリ

砧 謡

猿葉ノ砧謡ニ葦屋何事主事都ニ留リテ故御幸心元あり思ひ  
て夕御筈と云女を葦屋に下り其女下り有て主人の妻と共ニ  
砧を打し事を造れり

之を友お碓姫中社之傳記ニ日本武尊碓字言まふ向し葦屋港を見  
むと伝て浪城ノ岸ト云ふ名所ニ昔に聞く御方乃瀧と浪タツテ何を  
ニんへニ浪を乃まじしと詠し伝の其れより川に二里マッ所甚有乃

中ニ川ノ入レ見ヘケレバ高キ林ノ中ニヤサシキ碑ノ音聞ユ前ノ石ノ  
 思召林ノ中ニ墓多ク女ノ石ヲ打テ居ルヲ奇覽シテ都人ト見ヘシニ何  
 二ハ所ノ所住居ヤラニ我々寺天都ノ者ナリト給ヘハアウツカレヤ  
 妾ハ都大内ノ者ナリ魏言ノタメ流罪ノ身トナリ嗣ノ住居里該ニ曰ク  
 都ニ上リ所住シテ昔世ニ下リシヨハ地ニ移シ奉リシト云イマシヨハノ情ニ取カワヤノ石ヲ打  
 名ヲタテ務トカ云ヘリト云々前ノ所ニ移リ  
 魏姫ト名ヲ賜ハリナリト翌年四月ヲ送リコトニ却  
一方ノツカレク其石ニカサシ  
錦ノ袖今ハ泪ノ痕ノカワリ  
尚更ナシ云ト云クテハ  
アハレミキミレメシ魏姫ト名ヲ賜ハシ

多所より程直キ水巻、お太字な多字な城高住跡社ノ山腹、地ニ砂竹籠  
 石アリ同所ニ花石居ル此ニ砂敷ヤル如ク土厚ク鏡石ノ端城ナリトトヤヤ  
 比石ノ中一尺ヨリ二尺オ寸位長廿三尺ヨリ五尺余厚サ一寸ヨリ一尺位ノ石花行  
 堂思量ニ夕ニ高ク七間長十間年アルモノナリ此山ノ全山悉ク巨大丸石可石  
 石ト云ヘリ

あとがき

この芦屋案内記の 七葉めの戸数の所に明治四十二年一月の調査とあります。山鹿小学校  
同窓会誌第三号が発行されたのが同四十四年四月となっています。

依ってこの草案は明治四十二年から同四十三年の間に書かれたものと推察されます。

ちなみに遠賀郡誌が発行されたのは大正六年となっています。

筆者考うるに黒山蘆江老の書かれた芦屋案内記こそ遠賀郡誌のもとになったのではないかと。

以上の事からこの芦屋案内記は記述的にも貴重な記録としますので、読者諸兄の御目にとまる  
べく出版致しました。